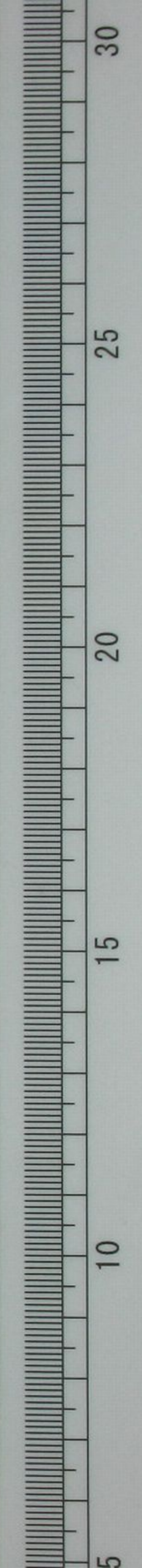




夜航餘話
下

土岐文庫
文庫17
W174
2



文庫 17
W174
2

航餘話卷之下

東陽居士著



學者とけりて分て端ら守して從頭より經學と稱するは
向上は馳くおこるべしやも經義の學問の本るれどおの
り小一蹴して到るべきはあはれむとて筆と彈をいひまじ
小一蹴して到るべきはあはれむとて筆と彈をいひまじ
手はあらひおがえりとも音もさえずり趣も得ざればお
ろくも何ともあはれむとて筆と彈をいひまじ
さへ書を解するもいはず暗く文字と取らつゝひある付
ともさへいひてたぢふ經義とさへいんととれは鄙語
り系何のゆがらあはれむとて筆と彈をいひまじ義理のおもし

航餘話

010185193506

昭和六十年二月一日
土岐吉彦氏 贈

事と心よりけり、亦、静と味りひも有る、此趣も身
多む、故に聖經と信ぶるの心おこるべ、迂遠ある空言のや
うにおもひ申して、斯文と侮り、讀むとや、淺すゝとす、さて
字面のしつり、淺解し得る、此も少く、其中は含みあり、
深意と得られ、何れど讀ても何の詮うらむべし、あはれど
小兒のまんぢう、此皮ばかり、紙がうて、餡と嘗ふと、紙あはれど
るが、いゝいゝとぞう、まゝと紙あはれ、つかふと、紙得べし、且、いゝ
ある至味も、よくや、え、熟せざれば、旨う、まゝと、紙あはれ、と、かま、煮の
教へ、うゝゝゝ、か、背、敵と、喫せ、か、ど、まゝ、いゝゝゝ、と、て、真乃
學問といふもの、出來立ざるは、是とみちびくもの、其方、紙
得ざるの罪、まゝと有る、まゝと、いゝゝゝ、何如して、良方と、まゝと、いゝゝゝ、

次第階級と得るあり、大學の物有本末、事有終始、知
所先後、則近道矣、中庸も、行遠必自近、外高必自卑
といふ、や、まゝと、第一は史學と、は、と、り、て、學問の地盤と
立し、其次は文字の、お、お、れる、為、餘か、詞筆と、り、て、いゝゝゝ、
て、や、か、く、文字は、慣親も、お、お、む、べし、是即經學ふすむの
階梯あり、先後すゝ所と失ひて、地盤と設ずして、
家とかま、階梯あり、に高きと登ると、欲と、いゝゝゝ、愚、あ、あ、
ざ、れ、ば、狂の、まゝと、史學も、十八史略も、入て、資治通鑑、
渉るべし、詞筆も、いゝゝゝ、七言絶句の詩と習がよ、此上
あゝ、經學も入るゝ、但、孝經論語の講とき、孟子左
傳と會讀するゝ、史略通鑑と並行べし、詩書易禮

よ至てハ地盤かこより文字こぬれ上をうでふあやすく
手と着べふんかこのどく循序漸進してこ我、真の學問
と成就もどぐれ大學よ格物致知といひ孟子よ深造と
いふ此謂ておのげく義理透徹して感服し其至味
身ふあきて我腸とあふあけ成りて忠孝とあくの道よ於
ふ事ふふ腸よりわき出く厚さ行とぞをふ吾藩の槍
師長井氏ふ上達の工夫と請をふ入ありふひこどぐ槍
と心ゆとありあくと喻しをり誠よ深切の要訣ありをろ
くの藝術皆然るべし學問の道も他をふとわく文字と馴
親むよあり書卷ふ向て氣げふ隔意よてを何でもをさ
事もひつとくたやみ聖人の道よ企およびかこく思ひく

あどぐと感徹信受とる能る何ほど書と讀ても道や
我と合躰せどして躬行の益よある事おふ故よ文字よ
親むより入ふものも學業の第一義あり其の初く入の
よりつと立ふハ詩とあるよりよりをわたりをさたり
余志をく人よ諭と學問の業ハ家と建ふがどし詩と習
ハ其材木とあるふたり字と識ても字と扱と知ざれハ
義理上すづりして鹵莽甚し故よおほくを倦で終よ半
塗よして廢學よいさげふ矻矻苦心して終よおのり
境界よ到り得ざるよりをわたり詩と作り得るハ
文字おのづから面白くなるさあは欲罷不能ふ至るたり
經史みる文字あり書くるものあれば文字おもあうくたるを

來らざれば其書紙おろし返く思ふよす終は倦く廢せ
るいじりる學問之道從詩入に祖來翁の發揮せしは海
外に卓識格言ありき且士君子として雅情をけしむる
固陋ありて物の趣とあらず淺ましく頑愚ありて俗は堪ず
あるふ是と輕薄の技とて頭巾俗儒のいさめ禁じらる
却て夫人の子と賊そととて之これ但し兼好は是より草ふ馬
のふと紙習ひし法師のほし僧の業をおろりて馬の
ふありけふいよそ思ひながらふありすきり此弊つひとまぬ
とば是亦用心をばさるなり

詩歌をもや無用の物るとど性情と吟詠とるの道具とて
無用の用ふ備りて行りる詩人よく此義と領會とて

すゞ世の中の事ども常の語めて書りて言外乃
趣の意味紙詩は咏し歌よよみく情紙述ふなり口上書よ
かきのづゝるほごむむむむ車紙了そとして是りぬ詩
歌と借よ及ぶるづゝ其の書のぞらぬ所をいひとり得るが
詩歌の徳よとまき人よと動り感ぜしめ不可思議の
妙用とあすものありさといひしつゝおつけよいひあは
しつゝ含蓄とる意味もさし何のほくさ一婦もるさ
たふ口上書といふものあり詩歌の數よ入るす詩の
妙は鏡花水月よめく在可解不可解之間と古人のいひ
けりも此言と喻せよ要訣ありしつゝいふ言外のおと
しつゝ婉りて章と成といふありさつゝ其品格

石のけうく氣くくくて趣深く味長くふべしとひびくぞう
よく聞かざるやうふと泥みて車の音とわりとくくあり
らさぬやうくくくくく詞もたけかく俗調は陥る樂天
の詩と白俗とやりのききかのかの口上書の躰あて文面の
外は餘意なく俗文と韻語の別はよくききかのかの誤り本
來無用の物をもは理窟と述ぶものふけいどあどなくおろ
う氣ある所は却て言外の趣とゆきみく至情と盡し得
るものなり

連歌師兼壽といひたるは歌をも好くうくくみたり近衛
龍山公よとくひ御批判を請をもよ心証盡くくよみたるも
おとしを連歌師のうくくくくとして終る感賞しめぬとくくみ

外よりとせ奉るべしとせひひり公家衆とたのめて兼壽と
みくく仰くくく他の歌よして殿下へ御目よかけあり
とくく是もゆくと入りの鐘よちりやせん外山のさくく色
はさふたりとよとくく他筆よくあくくめ呈したり龍山
一覽しめひ是も連歌師のうくくく兼壽めめていりや
仰らぬ此も兼壽承り近衛殿へ参り此事と申出し右
と誰の歌とてりやさりとていりくくみされたりと感しひふ
連歌師のうくく仰くくくくく連歌風とてりやとやきれは
さして汝がくみくくくく有様より其義申聞へくと仰
らふ兼壽おやめて罪と謝しこれ此歌いふものうくくみされ
ども外山のさくくくくく汝うくくくく上への句

お入あひの鐘もちりや勢んとあせいさぎしそ花と志とく
あひ志とふよ下の句よさくうとつひいひやゆるりすて
連歌師のうごひ連歌の癖出くこりり過るなりをせ外山の
梢といはくまはくぬぞと示しあふ兼壽始く心服しをると
なり詩も是よおあふいし盡して浅く俗なり

詩書と學ぶもの悪達者ると下手功の積りたるを引直
て上達せし難くかふかゆふは初學の時よとて師と擇
て先入と慎べしやしくも一ひあしく癖づきたるは
まひが性とるりて改べくば況やこれ改みけく満りとし
て節改折く過て改ふとまうすはふ如何ともまぐ
さけは

烏丸光廣卿志づく細川幽齋君のともやまゆきて歌の道
よまひあひふあまの御歌よさてありると思ふ
も難しやかりたそ改御退屈あるべくも今度飛鳥井
殿御歌と返しとみる改させゆのせしるも大勢の付合
やと思ひくむしこれ後の御歌一段とくひひかり
かびやてもやふ御歌風情をどあり過るやとなりあみつれ
まあひあひいひやる歌よみあも成あべし左おもひ
おのこれより難しはうとかり馬をもも氣のあらと
乗志のめさるやむむら改打はどなるい用よてぬものなり
歌の道も是よおあふと喻されたる光廣卿の耳底記よ志
ささくし揚子法言よいともふ在夷貉則引之倚門牆則

魔之海、深切の教あり、何の道と指南も、
 も、先のほど、手紙より、清く、ゆるく、いそぎな
 ひ道びくべし、進め、及て、いそぎ、
 獨り立の、やう、みづ、力と盡さ、いそぎ、
 屑の教誨あり、たゞ、いそぎ、師より、終上
 達、能く、服南郭唐詩選附言と作り、祖來、添
 削と、いそぎ、一見して、直よ、再思せ、
 う、一字も筆と加へ、南郭、鍛錬して
 再び、往く教と請る、又いそぎ、手紙つけ、
 を五、改作して、翁の許可を得、
 文筆大よ上達、いそぎ、

岑參憶長安詩、東望望長安、正值日初出、長安不可見、
 喜見長安日、
 月、同一感情の詞あり、歸思の切る、
 出、
 情あり、

武者小路實蔭卿の歌、
 置け、詞林拾葉、
 擣衣の題、
 擣衣聲、秋風吹、不盡、總是玉關情、何日、平胡虜、良人罷
 遠征、詩と、あま、面白く感吟、
 りて詠、衣、人の、みの長、夜、吹も盡、

秋風の聲とよみくきて古き歌どもを見しに後京極の
うらふ歸るべき越の旅人もちとびく都の月よ夜うつるを
何多感とくや沈吟して膽ははげしきなり右の詩と全く
此一首よと満ちてなり此方よとちか吹も盡さぬとて詩
の詞ととりても彼詩のかととはと少しをうり取て來
ふけりるなり後京極のうら何のこころとやふのんとりと
てまも詩の全首のうらずいれり前も幾度も見する
歌もかふ是よ心のほげりたりとて後今やうらうりや
うらうらんとて過しとてにゆきいくとく深意ある歌あま
しと語りあふ又ある日まのりたるよをちか雨晴とて天氣
なり四月清和雨乍晴南山當戸轉分明といふ詩は悠然

見南山の意といひくきよとて満ちてふとて詩なり春過く
夏來ふとて白妙のあはれもききせり天の香久山の御歌と
全く符合せり是も不思議なるものなり彼詩は此御製を
其後とて思ゆくのこもひぬ此外も詩歌と引合せて喻
あふ面白とて事どもおほし

長嘯子吾妻の記に大江匡房の箱根山うす紫のそが
をこれとよまれん二は三志保といはん料ありとけり志
を侍りしとすべくあ許はあふみか其色なるいおる
いづきさきありぬとてぬんよく聞きとてありむし人
をかうとけげみ至るぬと満ちりしとてなりまぶく古人の
詩歌の事の證據を引くといふ手あひくあうらなまはる

岑參送張子尉南海詩、樓臺多蜃氣、邑里雜鮫人といふも、海國ゆゑとれ、思へども疎り、登州の海に蜃樓のありは、名所ゆゑ、殊に用ひて鮫人の對し、やゝいふべき、題は切なり、徐貞卿の廬山の詩は下山、鼯鼠啼、藤竹使人迷といふも、明一統志に廬山多鼯鼠といひ、其地の詩は楓と咏し、越中の鷓鴣と稱し、楚蜀の行は猿聲といふも、其地の事實なり、此方詩人の輕薄ある、山中は鼯鼠といひ、海邊は蜃氣といふも、其物の有無は拘りず、とて、詩詞の套語とるを、

明人林道近、合浦道上の詩は秋清蜃氣高といひ、其の妄言なり、蜃氣は春靄澹陰の天はあり、高秋肅清の時、物の物は、東坡登州は在り、名ふは海市と見え、城をみ、文を作りて海神を禱り、これを十月あるが爲に出現し、も、古今希有の事なれども、是は小春の時なり、昔は春の、陽氣は蒸とて現り、なるといひ、人湖上の詩は蜃氣といひ、いさふ鹵莽の至る、さきにも東鑑に建長三年三月信濃國諏訪湖大島并唐船等出現片時之間如消而失と見え、又山野おもつゝ、事あり、聊齋志異は山市の記あり、池北偶談も載り、かたし、海にふかき、あや、

やゝの、聲と問ひ、儒者なるといふ俳句あり、宋の俞紫芝、夜深童子喚不起、猛虎一聲山月高の句あり、

其聲をきくべし趣を得ず對州より朝鮮屋舖は在番せし人の話ときくべし其聲ひやんと叫ぶやんと地を震らす勢あり殊をかききりてきえ揚りぬる賢實ある陶器と鐵槌と打破やうなりとせききい山月高といふ係らるべきえ揚りてき聲はほとくせり方と仰ぎあけりけし大どしれ月をみのけり皎々として嶺の上は懸りいと物ごとくすきゆとせり豺狼をのどくうなる聲あり山月高といふけ合へり

韻書ふ一東二冬といふは其次第強まるせき番はあなりとい探韻の詩題とい得某韻と稱せんとい得一東得二冬といれりとの集りおほく見ゆ何の爲は番付とせりあをい海ごの人の集りを見ゆもそい無用のうはけりといふべし

俳諧の護句は花とせは隣へも落葉といふ此句と咏せしものかむべし我の隔ありて意地より人なるべし風止て隣へといふ柳の那といふ系ぬん溫柔敦厚の旨よかるいとい殊勝なる善人と思ゆ風雅の理外の物るもとゆりて日ありて日ありて冬至梅といひるは藏とせり力やあて菊畑といふ系の風流ありて趣あるよあて詩歌中の此訣とあていあまちふ新一巧るんと考まへんかてせりあていひ出るものせり二三枚繪馬見ると時雨ふ此句盛唐の詩に似たり田

舎の路よりまぎらふはあつりれ叢祠へ走り入る避ぐる
ふ神さびしき森の木々の葉をふ打觸てまろくとぬるさ
音のきこゆるぬ風情ありやと説破す寸して言外ふ其意を
ぬくみえり走りけく松よ日のまほまくれりもあれや杜工部
王右丞をどの律詩をおさく方らばさばりけり了れ變化の
機をわけらの文字よよしくいひるまふり笑ふれや傘うまし
初志をまといや至る宋人の詩は似たりたふ巧を求く
餘味あり傘は雨の音を何の趣うめん負おしみの俗情ま
でいひるまふ浅まは俳諧こそたの技いさもいひあは近こ
ろ詩風よりまびとく此弊は流まゆくやうて浅く俗より弄
聞よゆる路より細く鹿の聲はゆるゆるして浅く俗より弄

巧成拙といふべし鹿の聲をいふ二日月夜をいふう婉く
して章を成り渾然として自然ふ趣深し是より晚唐盛
唐のまのまあり

家内をかきえり芽出しく歳暮といふはむげは浅き
と野調あるは何事もあるやとあはれは歳暮と直しき
は詞りごとく調高し宋の王仲至は日斜奏罷長揚賦を
王荆公奏賦長揚罷と改ると品格けり立あられり
かのあは篇成て語を鍊むは點化の工夫は盡すべし
光廣卿江戸より歸りあひ御門弟あちと待むりて御味
草と請はれは道より海山の風景ありて心のありむは
ちあちちとあはれり是よりいひる歌をよみ得

どのがさても珍らしし歌とこそ承りぬ是は見よのせせて
 我等が歌の御目ふききとすしりしれいりし人のよみ
 や貴卿さほどお感いあふよのほほきぬ名歌るましと
 いはとも耳とせむとそそそ光廣卿よとさゆと採り鼻紙
 の端よ書つけあひしとて是るあへと出しあふ宮の朝舟四日
 市とゆり關の地藏ととゆりとり皆あされく辞さ
 りしとハおのしりおほしりや是戀の歌とあし侍
 關の宿とつふ所と賤いさぎ遊女あまてゆり上下と勤
 び人夫とも此宿よ戀ととぬいなさよ
せみかみか今のとく宿
は貴女しげかみか
 江戸より上方へのほふふ七里の渡とあえく衆名の驛
 よ着てとゆり朝よ衆名と發ととハ關の宿まき十里ほど

あくきりりり關よとゆりんと期しぬみぬの舟とあ
 とく乗出して伊勢の海はは書書のなまゆ衆名ふつと
 てり日高るれハ四日市まで来り宿す關の驛へ五六里
 のほどあるゆえあけの日の午時をりみ行過るのりしと
 江戸より思ひきふけ戀のしりしとゆりみりゆり
 かちちきる歌るるハ關のをどりおかり寐の夢とむとさ
 恨といふんとて宮の朝舟の四日市とゆりといひは来り
 戀の詞の前後よあるれどもとゆりの女とふ其情らと
 しきさぬ言外よ溢しとゆり賤しともの辞と
 ハ其幹とゆりともゆり縁とさしと歌仙の意と叶へ
 けしといと深く感しとゆり都の家はとむと書はけ来りし

と仰々いばども始々感心あり、由々不賤の言をすて、おや
 うの故阿る意を、御心につけ、いふ、おや、いふ、御
 家は、よるりて、我等や、おや、いふ、感吟、いふ、誰
 よく物、お就、いふ、お歌の情と心、いふ、いふ、いふ、いふ、
 と謝せ、いふ、いふ、是古樂府の辞、いふ、いふ、樂府辭の詩
 と作るの要訣、いふ、御油や赤阪、いふ、田を、いふ、何と、
 いふ、江戸、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、
 て放逸無慙、いふ、憚ら、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、
 歌詞、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、
 事のか、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、
 を、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、
 詩詞、いふ、此格あり、一日、日知、添、老病、

一年年覺惜重陽、一日、一年、の義あり、千朶穠芳倚
 樹斜、一枝枝綴亂紅霞、無奈子規知向蜀、一聲聲似怨
 春風、正是霜風飄斷處、寒鷗驚起、一雙雙、いふ、此類、枚舉
 不遑、いふ、いふ、

樂府の從軍行塞上曲、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、
 いふ、農兵の制、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、
 其輩の情、いふ、述、いふ、詩、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、
 專、いふ、詠、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、
 川采女、いふ、事、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、
 いふ、いふ、戰場、いふ、免、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、
 顔、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、
 秀吉も何の爲、いふ、いふ、

嵐猛嵐の語あり、法苑珠林より、暴風といふ似る霞
 の字ハ晴雲日氣と受く紅あるといふ朝やけ夕やけの雲あり
 煙靄といふ霞の字と用ふべし、此頃よりいふ文字取違さ
 名抄より赤雲氣也といふべし、此頃よりいふ文字取違さ
 所より見ゆ灘の字ハ谷川の迫りて急湍となりたる舟行の難
 集阪上是則月入花灘暗といふ題よりよめる花をが瀬と
 も見るべき月影のわきて入ゆる山の遠く、新拾遺集にお
 題より壬生忠岑のよめる散やぐら花の夜よることも水
 無瀬をぞ思ふ月の入るべしとも川瀬のおもひさともあり
 今の俗ハ海路の難所といふことども海路をいふても後世を

海路や此字取用するあり、宋應昌が天工開物ハ所經道
 里萬里長灘黒水洋等処といふ陳沂遊海上鰲山記も
 降嶽乘小塊從者徒步綠海灘亂石間行とあり、甲
 曹とかぬといふはひとよみ違ふべし、殊ハ文盲の誤り、寛平
 新撰字鏡ハすてハ顛倒して訓と施しをれば、其のあみより
 やちり來しるや

唐の李山甫が詩ハ諸侯貪割據群盜恣并吞といふハ
 足利の代ハ末のさぬが、彼邦のありや、世亂ふればいれも、
 どの浅あると國なり、韋壯が鳥兔不知多事日星辰
 長似太平時ハ唐末の亂とせよ悲しむなり、かくげり

るぞく見ゆる世の中ふらやましくもすめる月く何ど
も何ぞなるゆゑ世の中ふかりぬよの秋の夜は月をく
みきぬ詩歌同情の感よえ佐佐成政が積雪と志のさ
くさく越したるを何事もかろりてくる世の中と志
でや雪の志はくぬむかざりかき感慨言外は何ぞ
より當時の事情おといぬとて何ぞとたり

加茂真淵服南郭許きてそのかろり小唐詩の漢魏も及
ぶるもや、汾上驚秋の詩もくぬ北風吹白雲萬里渡
河汾といふ、羈旅の秋情言外は何ぞとより、ゆゑふ一唱三嘆
すづし心緒逢揺落秋聲不可聞といふげよ上二句乃
注釋より、氣格けふふ落下とより、吾歌も後の世の劣り

降とふい全く詩の弊とあるとより、南郭も節と撃て感
嘆しるる也

楊誠齋嶺雲の詩、天女似憐山骨瘦為縫霧縠作春
衫といふ、いふらぬいぬ衣も人もあふもの成ふ山姫乃
布さるらんといふも趣向吻合せり、山姫といふ語も、楊升
菴丹鉛録に彼山姫野婦雖美而不都といふ、但しあ
と山家娘といふ

茶人の初雪と待くぬれしむと宋の丁晋公茶の詩も痛
惜、藏書甚堅、留待雪天といふ、彼方にもあつるを、
韋蘇州の兵衛森畫戟、燕寢凝清香の句、宋の范文正公ふ
く愛せしむといふ、武將の茶席よよと聯る、東坡贈劉

景文詩は荷盡已無擎雨蓋菊殘猶有傲霜枝一年好
景君須記正是橙紅橘綠時と云ふはゆとふ雅趣の窵は
中よりさるほどふ利休が壺口切の節ハ橙紅橘綠の時と云ひ
るより王右丞青苔日厚自無塵の句ハ殊は利休を愛せし
ともん邵康節の静處乾坤大閑中日月長も邵は小坐
鋪ふよりろくろく

他の國は遊寓して其地の事以稱贊すといへ人情うましく
思へる色ありて水土物産と云ふハ風俗地利とあり
さゆよといふはるる温とぬるむものあり蘇秦は六國は遊
說せしよかるらば先其國の美事と云ふといふ其君の心
と悦しりりりあそびと讀は其煩しきと厭ひるるよく人情と

得るよ手段ありたり唐の伊用昌といふもの茶陵は旅遊し
てありけるよ城下の町さびしき夜更の鐘鼓もあはれやうと
つ聲の聞へるれば茶陵一道好長街兩畔栽柳不栽槐
夜後不聞更漏鼓只聽鐘芭織草鞋といふもの詩を
作りをり縣官聞て大に怒り即日逐出されたりといふ
慎むべき事なり

王漁洋の詩を源氏物語の歌のどく平澹は過く水を
飲やうあり殊は氣うと力もあはれとせよはゆくと
てやすきよびよ聲は吠く雷同と云ふれよ其の著せる
諸書と云ふよ學識を厚くするなり
住吉や古事記よ墨江とあり萬葉集の中よ清江と志

とせる所、是正訓も、墨江を字面とてあふぶる江と
いふが、且虜地の名に似て、詩詞に憚る
べきなり、尾張の熱田と、和名抄に厚田とあり、雅しきめ
で、彼地は申傳ふ、其のなみ社地と定り、其
所の妨とあふ大楓樹あり、自然は炎上して田の中は倒
れ、田の水熱なり、熱田の社と呼ぶ、古と志
らざるもの、後の世の文字に就て、説の、或は寶劍の光
り梢は燃上りて、田は倒れ、水熱なり、尤附會の
説あり、三河の池鯉鮒も、和名抄に知立と書せり、文徳實録
中と爾り、延喜式も知立神社とあり、池鯉鮒とあり、假
名ととり、今の神池は鯉鮒を養て、あつとけり、名と

いと浅き、附會あり、信濃の諏訪を、趨波と書し、諏訪
縁記より、是亦好文字なり、尾張の長久手、長湫と書へ
るも、白石退私録より、

江戸の隅田川と、真名伊勢物語は墨多川とあり、伊勢
て、祖來の詩は墨水と書し、翁の手が、申傳ふ
も、黒山盧龍塞とあり、戎狄の地名の、
さくろ、流と聞ゆ、涼と美と事と、
詩は墨水の字と用し、殊に不都合あり、
さくろ、用べし、詩詞に、
ふるり、又山本北山が、日本風土記殘本は江戸と荏土と書せ
る、見は、奇と好く、專に用る、書舗果肆とて用

むつ橋直幹あけし下ふとて石山寺は請て湖水の
風色とあがめ蒼波路遠雲千里の句と得し其對と思へ
とも得ぞ足柄山まで案ずり行たりむとちとほとほとほとほとほ
柄山とてとらふ道とほく雲井とふきとて深山路ふ又とも
きぬ鳥の聲の直幹とて聞て感發し白霧山深鳥
一聲と對しきりともとて和歌俳諧の句をも意と留て其
趣とあぢとて詩料と得るとおほし
延喜の内宴ふ菊散一叢金と題とてふ善相公の詩
ふ鄴縣村間皆富貨陶家兒子不垂堂の聯ゆ菅公見
て賞しめり善相公とて望城失れり退て建禮門
は逢て教と請とけとて富貨の二字いとや

改く潤屋とありともさく仰たり善相公感服せしと
ありそののみ對法の吟味精嚴なりと見えべし垂堂は故
實の語るといふ高貨とて斤兩わかるべしいとも子偏枯の病
る字面も俗と免とす潤屋の語は易とひし真は靈丹
一粒點鐵作金の手段ありとあり
七言絶句と作子の法はむす末二句より緩り起して
主意とあるは申のふあり一二の句とありらひ添べし
頓阿法師と井蛙抄ふ民部卿入道とふれし歌は塔城
くむやうのむびと塔と上よりくむとあり地盤よりくみ
あらしやうの下の句よりくむとあり詩歌ありと手
改るなり

聚樂毛利家の邸にて、紅梅と賞せしむる連歌、法橋紹
 巴の梅の花、神代もきくぬ色香のちりきり、九條植通
 公きくあひく、業平龍田川のうらひ、と色まひめて水とく
 り、神代もきくぬめぼし、と事あり、精を入し、所あり
 何と名とり、と梅と、神代もきくぬ、とつと、夢菴、伊勢
 よて冬きけ、と櫻と、冬きく、神代もきくぬ、櫻かといひ
 か、所も神風の國、と、殊と櫻と、太神宮の神木、と、んか
 かく本歌、と、も、と、毛利を神家、と、何、と、と、の、と、ひ
 くと、天野氏の塩尻、と、ある、せり、詩を作ふ、と、よ、所、から
 と考べ、と、其處、と、い、い、さ、る、出、す、と、と、語、と、用、べ、と、す、い、あ、る
 の城下、と、て、都の稱呼、と、犯、し、陪臣大夫の家、と、於、て、王侯、と、

こと事といひ、い、い、の、事、と、稱、さ、る、と、い、は、け、る、と、を、と
 ち、と、語、と、用、て、僭妄の罪、と、犯、し、た、と、名義の關、と、所、に、重、く
 慎、べ、と、の、至、要、あり、
 屏風ふと油の張、と、せ、ふ、と、い、ひ、名筆の色紙、と、て、も、百人一首
 三十六歌仙、と、出、し、る、歌、を、何、と、い、ふ、ん、俗、と、見、ゆ、る、もの、な
 り、と、い、は、る、人、と、り、と、于、鱗、と、唐詩選、と、出、し、る、詩、と、掛軸柱聯
 り、と、い、は、る、など、俗、語、と、い、ふ、もの、に、似、たり、顔氏家訓、と、古今
 語、無、雅、俗、唯、世、之、罕、道、者、似、雅、と、い、ふ、を、い、さ、る、事、や、と、
 一、と、い、は、る、平生、と、い、は、る、語、と、い、は、る、もの、ゆ、あ、る、人の詩文
 ち、と、見、ゆ、る、奇貨、と、得、し、る、もの、ち、と、て、詩、と、い、は、る、ひ、文、と、用
 て、人、と、い、は、る、と、い、は、る、を、好、む、ま、と、い、は、る、を、い、さ、る、と、い、は、る、と、

夜枕餘話

卷一

三

其語の自然はけりしるる可なり、斧鑿痕のあつては
へい、輕薄なりたり、

懷紙は詩法をとりて式として之の行は題とありて、次は姓名、
卑くあるは、七言絶句の詩と措は近き行書とを、八字、三行半
ふあつて清家菅家おのゝ傳へらゆ式ありて、行りの字數墨
はどの法をも門生傳授の秘訣とせしめ、いふも古より傳へ古
實あるを疑はれ、疑らるる和歌の式とす、ゆるやうなを
ぬとも思ひたる、後唐の李建中が手跡と墨本は措は得け
るは、何れも懷紙のあつてありたり、いふは和歌の懷紙も、唐詩
の式は倣へるや、何れもすく物の源と窮り、くみり
は車法沙汰とれ、諺といふも、や屋といふて、昔家法とる

と多くあつて、謡曲の詞は、あつてふまのまに、まひやく、誠なる
いげは慎むべき事ならん

商人とあそんと、いふや、古言の雅詞なれども、常といひるは、せ
るより、俗に聞ゆ、いふびと、を却て雅なるやうと思ひ、まも
顔氏家訓といふ系、語本無雅俗、只所常言者、俗なるなり、さ
ゆゑ、や古今集の序も、あそんとよみ、いふ、藏人とらん
といふと、いふら、こららの違なり、老學菴筆記は、吳幾先
嘗言、參寥詩云、五月臨平山下路、鶉花無數滿汀洲、五
月、非、荷花盛時、不當云、無數滿汀洲、廉宣仲云、此但取
句、美若云、六月臨平山下路、則不佳矣、幾先云、只是君
記得熟、故以五月為勝、不然、止云六月、亦豈不佳哉、と

事と舉論して無益の筆陣と競へり外國人より多きみ弄ら
せりてゝ氣の毒なる事地ほりたりさほほごま堀川護
園のいよ及つばたを見識ある儒家を其の役かりよの
さる外も一人も彼席へ出ざりたり其詩文筆語と輯て版よ
ちりて先世よむけりてきほを殊におとあげたり輕薄
なりたり

江戸より歸とて強く聲とあり方言と
ほひあぢぬものやうよあしらるるをけあさ心ざぬ小
ぞ阿りをも司空表聖河湟有感の詩よ漢兒盡作胡兒
語却向城頭罵漢人といふわらもぬまも輕薄のなりの
いふてよりきほ世の中なりきり天明の比より尾上梅

幸しくいふ俳優の名人阿りきり久しく江戸の芝居よ阿り
いふとび上方へ登りたれば顔見世の口上よ阿ぢぬ訛り江戸と
ばあやうしく面白く興ありて思ひくるよいさうとこと
ふびとさうけとてさすぶやうとこと人感へ阿りさあ
ひるものあや川原よの操よを芳とていふと耻べさ事よ

浪華の鳥世章の家婢とて仕て居やとてさる不儀よいと
ゆととくさ小葛子琴の家よけり又ゆとて去りけり
初め世章の家よ詩會ありさやひは醫師沙門お交りてと
もすがら情く地よ密談とてさるまて又折やとて豪爽よ激
昂よそれハ謀反とて企不黨よと疑ひて禍と恐とて彼家

て去りけるなり子琴の家は仕ふるも及て世章もやもが
來り會して又初のふ有るは見えたるも彼黨類るりと
おどろき成は又いし海と取るなり、却ては是は人な語りて
身ぶひして畏うしかりけり、ある由井山縣事なる
軍書との語は成きそ、せめて思ひ合せて疑ひ懼し、なり
し子琴語りて大に笑へり、鶴林玉露は宋乾道間司業林謙
之與正字彭仲舉游天竺小飲論詩談及少陵妙處仲
舉微醉大呼曰杜少陵可殺有俗子在隣壁聞之告人
曰有一恠事林司業與彭正字在天竺謀殺人或問所
謀殺者為誰曰杜少陵也不知是何處人、のり相似る
事、もどけり、をい

夏月しつゝ子題あり、俳諧の發句とせし、初進の人あり、
蚊といひ、ひさし、ひはと、夕月夜と口す、ひさし、宗匠賞美せ
し、喜色眉目は、あま、ぬ斜抱雲和深見月、と、詞を、
とど、琵琶と、子、抱、と、あら、一段風情深う、さ、
と、を、れ、其人、憮然、と、と、の、攀、の、ば、義、あ、
問、々、を、の、意、の、枇杷、と、ち、ぎ、り、て、採、と、り、琵琶、と、把、
たり、あり、座、を、あ、り、と、と、出、せ、り、開、卷、一、笑、と、い、
本、よ、莫、廷、韓、過、袁、履、善、家、適、村、人、獻、枇、杷、果、誤、書、作、
琵琶、字、相、與、大、笑、屠、令、君、續、至、廷、韓、笑、容、尚、在、面、
令、君、以、為、問、袁、道、其、故、令、君、曰、琵琶、不、是、這、枇、杷、
袁、曰、只、為、當、年、識、字、差、莫、即、云、若、使、琵琶、能、結、
果、滿、城、簫、管、盡、開、花、

徐氏筆精中もあつたは、ととる亦似と事おや、つらふ
王勃滕王閣の詩、殊は簡短して、淡薄なり、あつた序文
は靡麗と極まるゆゑ、わざや、淺くして巧と用ひ、すゝめる
一張一弛の法なり、ゆゑへ饗宴のちやうふ、美味厚腹と盡
しゝる上へ、薄むよりの吸物おく杯と收むがごとく、あつた至
て更な濃ある物と、お多へ興と失ひて、殺風景ゆゑへ、源氏物
語のうゝと、よく此手段と得たり、文を妙るごとく、歌へ拙く
とせしむるへ、張弛の法と、あつたさるの固陋なり、小説傳記中の
詩も、皆よきと平易淡泊ありて、淺近なり、さるは、滕王閣乃
詩と干鱗が唐詩選と取らるへ、誤と、宴席は美饌と、よき守
して、薄むよりの吸物げり出せふよおと、殊は無興あり

とや源氏の歌おほれ、とも一首も選集と取入らるへ、干鱗よ
しゝ此識鑿なりを、何とや近と、隨園詩話の話と除て
詩と、り抄して世に刊行するは、あつたこのかゝりなり
ひさかたの天と、ふと、飽象と、ふ義を、さるよ、真淵と冠
辭考よ、しゝ、唐の章孝標と題、朱秀城南亭子詩よ、朱家
亭子象懸、飽と、しゝ、亭頂内圓ありと形容せらるり、明の
王彛と詩よ、天形咫尺懸、如飽と、しゝ、正しくひさかたの
天と、しゝ、形容の見と、つたの、おしゝ、和漢同案と、あつた
韻と、探と、得と、字へ、あつた機要と、用と、活動の妙ありて、や
押得と、手がら、あつた、又反韻へ、古詩の用なり、あつた、い
ちゝ古詩と、あつた、ふ律絶と、して作り得る輩の向上

ら〜古句と分〜韻と〜ふ〜分と〜さ〜さふの備安あり
平生平韻多〜で用〜さ〜強〜反韻少〜近體と作らん〜い〜
は〜ふ抵死苦吟〜々、一笑少〜ゆ〜ぎ〜物と出す〜い〜
て〜り〜を〜入、故〜古句と用〜韻と分つ〜手揃の時〜さ〜て〜
為〜し〜さ〜なり

東人詩話ふ、杜工部詩、身輕一鳥下、脱一字、陳舎人從
易與數人各占一字、或云疾、或云落、或云起、或云下、莫
能定、後得一本、乃過字也、とあり、源氏物語は韻多〜さ〜
と〜ふ〜へ、即此伎倆と試ふ事なり、
頓阿、北野社のう〜、松〜え、此木の間は見ゆ〜神垣や、風
と月との阿〜ふ〜と〜あ〜〜ん、松、此木の間は奥〜さ〜く見ゆ〜神

垣の名あり〜ゆ〜風月本主の社〜さ〜ゆ〜ゆ〜ん、此の尋常な
〜ぬ〜し〜と〜問〜す〜して〜ゆ〜あ〜さ〜し〜と〜あり〜う〜の表〜此通りふ
〜、奥意小趣と含〜り、風涼〜〜松〜枝と吹〜けて葉と
〜は漏來る月影の若〜り〜ろ〜く神と樂めゆ〜の〜する〜さ〜ぬ〜
か〜景境と管領〜さ〜ふ〜ゆ〜と〜風月の阿〜ふ〜と〜あ〜ゆ〜ゆ〜す
〜、大雅の徳〜ゆ〜め〜た〜く奉〜と〜あり、本朝文粹大江匡衡
の文、天滿自在天神、文道之太祖、風月之本主也、と〜ふ
諺、解難註、い〜の〜ゆ〜ゆ〜ぶ、本居宣長、草菴玉篇、も、此典
故と引〜ゆ〜漏〜して、骨〜さ〜物〜さ〜し〜し〜り〜を〜海録碎事、ふ偽
蜀、歐陽柳守嘉州、日青山、綠水中、爲二十石、作詩、飲酒
爲風月主人、豈不佳哉、とあり、匡衡の賛辭、是は本居

さしるるに似たり然ども海録碎事當時已よ 本邦に流傳
せしや否知べしす、恐くへ暗合しるるをん

南郭小督詞を千秋の絶技といふ、此後諸家あるは倣
て妓王詞千壽詞をど作さるおほけととも南郭の半をも
及ぶと見ど南郭人は語りをもふ、樂天の詩と人かりしむと
も琵琶行長恨歌などの妙を樂天はあつたれへ作し能く
す余小督詞を樂天は擬して、樂天の及がさる始てあり
ぬらん、いふも骨折る事とあつた江村北海おもしろく
御史中丞臣仲國を漢宮の句は應とて稱しけさるるを
あの方れ御史中丞を殊に威勢いなりき職を、夜中階下
かどに蹲まり居るものよ何ぞ況やわけおちの妾と捜させ

小行をめんや、さあろく人を見と合點すまじさるるがさるゆ
えよ余の詩選に載るに依得ずといふも是ぞ玉に瑕をるを
予漢宮と改て内苑と、彈正大弼臣仲國や、可たをし
左ゆへ唐人は示して期門の類をんと見てさむべきを
予、因て驄馬も匹馬に改め使、御史を奉間使としてよろし
すべく護社の徒は唐かさの弊を、稱謂と誤ふと、おほく
郭震、子夜歌、柳澤淇園子の奇意せふあり、陌頭揚柳
枝已被春風吹妾心正斷絶、君懷那得知、何どさるわら
さ辭氣をくかまめうしく譯し得たり、此れは我の單
相思ゆへ、情人の氣はさる城かち、さる戀をさる
予をさる、さるもはさる、有ますものよ、さるさる

心みくおのふそとて何とては言ふは説破らふ芽出し柳のみづく
ふみどり滴るるりふ春めささふ風は吹きくよしのをりつ
あをふくさ風情のらうめし思ひとそ平く浅く詠ト
とらふ是樂府の妙趣なりその氣味とよくも寄意せしと
り世よ兒女子のそとてやと長相思卒の露由り此月をの
たれ歌か此人の戯作るるさしはと風流の絶才なりをり
崔顥は長干行は君家住何處妾住在橫塘停舟暫借問
或恐是同郷のを湊入の商船とびびりて賤妓のおく賣す
ふ手くこれ傳ひ詞とのくもなりかく没緊要の問と設く
唐突は客船と呼ひ舌をさくひより親む舟をらんちう
走りか絲るるのひかりをりこれとてあはれをり

まにめん餘意おのつらう言外は含蓄なり是亦唐詩の妙
なり次の詩は家臨九江水來去九江側同是九江人自
小不相識おと賈客の答辭なりとちと彼がものくぞるる
詞は打のりてまもや同國の産なりとちとみとあて
そ何とと心とろくをひき感ひるたりとみして亦おし
同是九江人といはるるもよあはれ火の筑紫うまるとおと
かひは鳥がたう河はぬ入るるよとらひとけつととら
答なり初よりかの野鴛鴦のけりともみづら故郷といひくと
指定めていておとさふゆゑ此答も亦茫然としてとらり九
江とのく暗中摸索の巧技弄すといひは欺む輕薄のな
らうといふ輩の風流なりといはて此二首の本づく所は古樂

藍の妙を得しり、おるは男女の情を述ふ詩ハ字音に就く意
と寓すふくおほく張潮ヶ詩と灣の字のそふるす、菰音孤蓮
音憐の縁とかりて、吾身の孤寂する境界と、夫婿と愛憐する意
と、謎語のそくよせしり。

いづへ白氏文集盛に行つとく、苟くも文字に多げさるるの
此集は夢寐せさふいるるれは、此詞は取用するおほり、後京
極殿のおりへ袖をなげと世の中は貧しく民の冬の夜は
とよみあふ、樂天京尹より、時ふ新製綾襖感而有詠水波
文襖造新成綾軟綿勻温復輕、百姓多寒無可救、一身
獨煖亦何情、心中為念農粟苦、耳裏如聞飢凍聲、爭得
大裘長萬丈、為君都蓋洛陽城、といふふは、本づきしり。

法性寺殿のさだしり散らふまて、みよは花のそふ
る廿日、魯よりとよみれ、新樂府牡丹芳、花開花落
二十日、一城之人皆如狂、とある小據、さるる、是より牡丹
とよつ草といふより、吉水和尚の人とよむつ、の癖は、あつと
と、わとつ、いひ、を敷島のそち、人皆有一癖、我癖在章句
と和らげ、さるる、清輔朝臣なつ、い、此、あつ、あ、志、の、を、と、
う、と、見、し、世、と、今、と、戀、し、ま、今、既、不、如、昔、後、應、不、如
今、と、上、下、轉、倒、し、て、よ、み、さ、る、る、と、和、泉、式、部、の、そ、ら、と、も
よ、昔、の、下、よ、い、朽、す、し、て、埋、を、れ、ぬ、名、と、見、る、を、悲、し、ま、龍、門
原、上、土、埋、骨、不、埋、名、よ、本、修、く、大、江、千、里、の、月、見、と、千、と
よ、物、を、悲、し、ま、れ、我、身、ひ、つ、の、秋、よ、あ、つ、絲、と、燕、子、樓、中

法性寺殿のさだしり

法性寺殿

霜月夜秋來只爲一人長とりらるる俊成郷のむら
おもふ草のいほり此夜の雨は涙ふとせ山をときんをく廬山
夜雨草菴中とふまくくりり定家卿旅宿夜雨またび衣
ぬぐやた中の緒ゆるの雨袖よとれくく夢をむとづぐハ旅館
無人暮雨魂と襲くふるり其餘悉く舉るまいとゆあくすや
のかと單よ文集といふく白氏の集といり山といぐひえ寺
といふ三井のといくよるん阿り々か

鄭鷓鴣、鮑孤雁、謝胡蝶、崔鴛鴦、袁白雁、楊春草るとハ一首
の咏物よりてめいりくの名と得りり又一句よりて佳號と
なりけハ冠菜公と無地起樓臺相公と稱ハ僧參寥と隔
林彷彿聞機杼和尚と歸ハ張子野と月來花弄影郎中

とハ宋子京と紅杏枝頭春意鬧尚書といふ此方もても
名歌とみ得て其詞の表端よりをる沖の石ハ巒岐々と
紫の加賀待宵の小侍従と草の宮内卿下萌の少將と
浦の丹後とのうの藏人初音ハ僧正と後の世もおと
ひても夜の雨の城了日ら終の正廣かくと家の茂助と絲
との與平いくと帯の紹宅とくと世隔とりても其人のやと
さおのいやとておはり々と侍ふ

年もあらうと狐狸の化とふハ死とても容易ハ本態とゆらいハ天
とあんかの晋の豫讓がとりて天下後世と誑らると意ハ承振
古の大妖物とり々り其心術のさもくハけとくとあらうと輕薄
不義の士とり始と利祿と節とうとるハ終ハ名聞と身とと

かゝる大は虚名強盜とて千載を欺き得らば俗よいと云ふ山子の
山城志の如き系者も今この世もては仰がゆも詭遇の僥幸
少や阿りけし其讐趙襄子子不嘗事范中行氏知伯盡
滅之子不為報讐而反委質於知伯知伯亦已亡矣而
子獨何為報仇之深也と責多ふ小范氏中行氏皆衆人
遇我我故衆人報之至於知伯國士遇我我故國士報之
答も亦いふ沙汰の如きりの不埒もいふ君も仕ふ志も君
雖不君臣不可以不臣の道ありと申し先主の如きらひと
厚くざりしも身命と養へしと恩の浅くはべ仇を報らるま
でと申すなり其仇の家も仕ふかりあるべしと云ふ福島家の
浪人よ久留島彦右衛門といひけるは武功の名士ありと云ふ

我藩の 太祖とていひし舊祿五千石は倍して壹萬石
ありしを召らるる御恩を有かき候へども 和泉様と
大夫と不和よおとす候へば仕へ奉りがごとく辭し
太祖ありし感とて惜みあり此より紀州へ聞傳らるこ
ろこのごとく萬石とていひしと云ふへの誠は君子違難
不適讐國の義いさしやもいさし故主と不和あり家ごも
仕へ避へる義理あるも況や主強あらばいさし仇も身と委縁
けら天地も容ざる大不義あり殊き恩の厚薄と計較し
て主を報ゆるの輕重とていひしと云ふは商賈の
心ごぬ魯仲連が志とて雲泥なり士の風下とて置べしと云ふ
のりなり

史記魯仲連曰貴於天下之士者為人排患釋難而無取也取者是非商賈之事矣此

そは法と免強く世の手本とたふゆかしく天下の人と愧め
むやむど欲するも初より亡主の爲はとるふい何ぞ全く俠
氣の矯激しめておのが名のたれは事好くするれも吾所爲極
難といふに至るは殊に驕慢の口氣いとおかしきふほど僅に
裏子が衣と請うけんとて撃て怨を報ふふ糸くは
てらやとて兒戯のうけけり況や本望とどげ得ずして
より討つゆふを義とおいへ懐慨は堪ふべき苦あるふたを
強くおせ悦びて三たびまで躍り何なり身ぶりあは
く又とていひやうは輕薄不實のふふいひと戰國策史
記とさるゆふあれ朱子の小學も載て人の鏡とていへら
りといふる料簡ややういふ鳩巢小説もあるせふ向坂何

一兄の仇や心げくふふ男色の契やをそ者ありて仇の所と
聞出し來り汝は力強合せし速に討べし心中を思ひ候へとい
たれは向坂大に怒りしは色仇と稱ふは汝と頼とて討べし爲
て兄弟分をかり候とおひしとや左様のさる心底といふ
で秘をあら致ししはあせ悔しとれとて交を絶り歸りきり
とくすふ間は其仇病死しと色は向坂む秘んの至また手終
氣鬱して身とりぬ 東照宮此車強とていりわき
者もく心得候へとて君父の仇と討ふ武邊名聞は拘りふべ
くは女と頼でも討得ふがふ人と頼でおとていふ義は何
びとて時機とていふらば早く討が肝要なりとて御論
し何りといふん尺と枉り尋と直るとは是れ大事とてな

その權道ありて大義の本と失つて忠と盡との一心とつ
らぬ六假の二三其徳とも何ぞ不可せんいつたる詭道と設
て君父の志と違ふべきなり左氏傳に載る晋の解揚が楚乃
軍を捕りて中むと成得て楚王の命をかへし遂に晋の
命と鄭と違ひて籠城と堅く守りて刑に臨て楚王にむ
うひ信と盡とが臣の道とて侍ると申すと汝許我而背之
其信安在と責らるる所以許王欲以成吾君之命也
と答たり奥平家の鳥居勝高が車と一般なりされし假は仇家
は仕へんも故主は志と盡とを爲せんを悔とよ一心のけりぬと
ふふなりあるは爲人臣懷二心といふ士の耻辱といひけ
んやことほどの道理ともしもまじく人の手本とせらるん

と欲しうゆをおとすといひてつる君父の爲は仇と報ぐるか
世の人此爲よせんといふうゆを我といふも淺く二心を
うゆふさふても人の非をあぐくも君子の事は何れあ
ちからみ誅心の法正といふ意地よりさふ似るも士道
の害と恥とが歎かへる屏と燃して其妹と何れぬ世
の人此惑と解く士道の義と正すを師儒の務よらんゆとふ
已と成得ざるなりをいふ

係之以詩二首

怪汝虚名瞞古今 靦然忘義事仇深
主家報答恩輕重 計較算還商賈心
只合投機直復讐 好名自苦故夷猶
斬衣三躍徒兒戲

不妨為臣就易謀

宋人晁冲之曉行の詩老去功名意轉疎獨騎瘦馬取
長途孤村到曉猶燈火知有人家夜讀書いとも感慨
ふうふう作るりこころ時り書とよみ學問してゆつと國家の
用よ立んと意と奮て心ざうるよとて運はるる不遇よ
してさるる功名も成得ざればふ老おとろるるは随てい
とも其意も切るるずるるぬ折角よ志こころる學術かびるる
く持たさるるよちりるる遂よ輕さ田舎役人ともさるる
てともと遠國へさるる下系よ肥馬も養ひ得ざれば小荷駄
同様の物よのりゆつとよ浅よるる境界さるるるあふ
曉と侵るる驛程とゆく路傍の村舎よものゆつとて

火の見ゆふはもす書とて人ゆつと覺ゆいある人の
ひとこやん奇特殊勝さるる心ざうるあふとていりり氣の
毒なる事ありと我身のむつと感とておの行末とゆつと
いともおしびるる古今集よ凡河内躬恒とのおのひさるる時
いとたさるる子城見とありふ今さるる何生出らん竹の子は
うたふとあふとせといあふずや全く此篇と同一感慨あり
瘦馬長途の句は唐彦謙が長陵の詩よ千載豎儒騎瘦馬
渭城斜日重迴頭といふふ杜子美の古來存老馬不必
取長途と湊合して豎儒の嘆と内よ藏と殊よ恨と寄るる
句より等閑よ者過すつとびとて一二の句は領會せざれば
三四の意ういすつとて深き感懐と感づるといふ直り

字面のまづふて、平々々々淺易の凡詩のまづ書と云ふ
詩と見る徒、上は、の解、易さゆ、胡椒丸吞ふ、合
点、底意、含り、肝要の趣、あ、川夜舟、行過、此類
甚多、り、

范石湖、寒夜獨歩中庭詩、忍寒、索句、踏霜、行、刮面、風來、
鬢結、冰、倦、僕觸、屏、呼、不應、梅花影、下一窓、燈、あ、機、開
と設、る、作、ゆ、一、二、苦寒、堪、ず、第三、殺、風景、極、ま、其、妙
只末、一句、は、何、れ、お、と、吐、の、と、手、段、を、觸、屏、の、字、ハ、漢、書
陳、感、傳、の、咸、睡、頭、觸、屏、風、と、取、來、と、故、は、睡、り、あ、け、る、と、い
や、其、中、は、何、れ、け、こ、夜、と、て、お、深、く、庭、の、面、も、凍、る、霜
を、し、ら、た、は、踏、く、沙、々、と、鳴、ふ、お、う、く、と、げ、く、風、來、り、て

頬の皮を刮むくど、鬢までも氷りて硬さをほとるふな
或詩とあり、苦吟、く、い、庭中、と、徘徊、と、い、痴
情の物、ど、さ、り、り、さ、て、家、僮、は、茶、を、煎、ど、を、置、る、み、ぐ
る、と、お、び、と、音、せ、り、倒、と、物、と、損、と、と、
なる、お、打、驚、く、何、と、呼、は、應、も、せ、ず、い、や、と
見、る、れ、梅、花、爛、漫、と、さ、れ、る、書、齋、の、軒、は、掩、映、と
その花の影、れ、下、窓、の、と、り、火、の、印、り、う、け、り、い、と、幽、る、
風、致、と、認、得、と、り、う、と、事、い、ん、方、を、お、ろ、ろ、さ、り、
上、三、句、と、殺、風景、と、述、來、り、末、句、は、恍、然、妙、觀、と、現、し、て
大、は、佳、興、と、り、返、し、り、近、と、捨、て、遠、と、求、る、れ、お、ろ、ろ、か
り、佛、家、の、い、と、い、迴、頭、是、岸、の、お、も、ひ、さ、り、り、戴、益

か探春詩は盡日尋春不見春芒鞋踏遍隴頭雲歸來偶
過梅花下春在枝頭已十分とあるも、昔の合せて味へし
同人桐川郡圃梅極盛皆圍抱高木浙中無有家住丹
楓白葦林横枝一笑萬黃金玉溪園裡逢千樹還盡春
風未足心こそいへう聞へくも詩多しと人おほく解ると
能へば石湖俗吏と有りて桐川の役屋鋪ふありたるも其後
園おびとくも梅花もあつても古木の太樹あり故郷の浙中
も雅景の地多しども却く梅へ乏しくりこれいふも見事な
る梅林は始と見るとと得たるなり此題意と會得ととどが
詩意とのびくも分明なり我住たる故郷の家へ江水は臨する
處多しと岸頭のもみぢり秋を紅と疑ふ汀多しと原のけし

と冬枯のきびしくも又阿もれなりも風流雅致の境なれば春を
梅花よ之より多しと所がなると甚少なり寂寥なりて林
外へ横より出ると一枝と見れば、珍らしとむつとて賞
玩の淺くもなると價萬金なり覺へるもおほくむつとて
たり横枝の語は林和靖が梅の聯は雪後園林纔半樹水邊
籬落忽横枝とあり取るとなり一笑も花の始と咲くはと
るもいふも我もつとく笑と會て見事意とも寓す所謂雙關
の語なり玉溪園も郡圃溪水は臨する故の跡なりとさしど
一段清幽の景境なりとあり數かたりもあつぬ梅の盛りも
逢ふは得る年来梅花はむらつとける恨とつとつとつと
の春あつと十分はたなりとぬと悦むなり

いゆく歌々此癖と申は道綱の母より火よき
目とて案と和泉式部を引ぶるてよみはどの時にか
や成懐よき入るかぐらると心ちりすして思と凝との
為るべし唐王勃為詩文引被覆面卧起即下筆不休
時人謂為腹稿宋陳師道平時出行每有詩興便急歸
擁被卧而思之呻吟如病者と文海披沙よきと舉る
古人の苦心と感トる

篠崎金吾和學辨ふ時風の輕薄とありて先死ぬ内は
詩文集と板行しとて世の中とては護園の徒と
指さるる奥田三角よきと書と見らるる南郭文集上
木の候存生の内は家集と公よきとありて事よ

て候彼社中ゆてもいかり候あると生前は集と版
とる南郭よりや始れ今と世のありとありて
び人もいりるるありて五代の時よ始り明よ
至る盛よとる古人の書多可傳者未嘗自求其傳也
藏之家或當時或後世人見而愛之為之鑄刻與衆同
好故可傳也五代和凝有集百餘卷自鑄版行於世識
者非之可見前此無自刻其集者今人不自量其詩文
可否槩為鑄版行世是以傳者少而不傳者多也と雲
谷卧餘小と近ごろ又一弊と生じて集本よ人の評と請
ておこし批評としていりての滴とありて辭
と靦然とて世よひをさるる由る輕薄浮華の至りおと

多げ多く厚き顔なりなり、藤崎と祖來の門人なりけり、山田麟嶼よともかひ上京して東涯中も從遊し、これ三角と親しくあり

わと諸生より頃々詩人咏物と競ひ、先輩の如く、輕薄と云、況や香奩辭の如く、指と捺ぞりけり、近年々竹枝詞おとろけ、狭斜淫佚の歌、輕薄とは、風流とは、至り、詩道と汚く、風雅の罪人、天下詩詞一出人、爭傳之法、雲秀禪師、鐵面嚴冷、能以理抑人、嘗謂魯直曰、詩多作、無害、艶歌小詞、可罷之、魯直曰、空中語、取非、殺非、偷終不至、坐此、墮惡道、師曰、若

以邪言、盪人、淫心、使彼、逾禮、越禁、為罪惡之由、吾恐非止、墮惡道而已、魯直領之、自是不復作詞曲、と云、香奩竹枝のゆゑ、實は罪惡の由なり、況や演劇院本の作者々、無間地獄に墮つるなり、

歌々、道々、戀の歌とよむり、堀川院の御時々、艶書合とよみ、此出來より、けし、糸おほやけの命とて、みぢくの人々、かほ詞と奉ら、和歌は、耽ふ、源氏物語の行り、みぢく、王道の、後光明帝の歎く、せむ、かけ、御言を、り、荷田春満、歌學復古の宗匠なり、を、男女

のちぎり何事と物よをく心よもあぬれ言残
出ふを誠とのぞふ歌の本意すすく戀の歌のつとま
ざりたり有るは卓見といひけり兼好は草よ
らびよみとく色このまきん男いひさうし
く玉の杯のとこを心地とすく戀せす人を心も
ふらふ物のあるを志ふ俊成卿の示
されたるいふもさるる出辭氣斯遠鄙倍のい
しらふや入弊とあはるむの金言るらん古賢の行
跡と傳よ志をせむ口未嘗言淫蕩事より徳義の一
として稱傳へたり詩はる歌はむ此戒とけし守
へん父子の間と唱らぬ詞は口と絶くいとふかどかか

慈鎮和尚のこが戀を松よまごこの染るのくすく原よ風
さやかりと艶情と盡せ歌よまきへ参寒子か鞆
鞆よりも甚く破戒の罪よ近きへ當時の譏や神
けふいへる加藤清正の家は捉ふさふひの歌はむ
禁せしとさるかきさぬの弊おほきまより士風の柔弱は
流るれもさ風俗と害りんとはいともさるる武家
よおのこげまと思也

右摘録反古抄中係詩話者凡

夜航餘話卷之下

[Faint, mostly illegible handwritten text in vertical columns]

製本發賣所

伊勢國津

木村光綱

